資料

賀来飛霞略年譜

山下愛子

年号	西暦	年令	事項
文化一三	一八一六	一	正月晦日　医家賀来有軒の三男として、高田（現大分県豊後高田市）に生まる。母政子は、杵築藩鈴木公豊四女。通称睦三郎または睦之と称し、字は季和、飛霞と号した。異母兄佐之は当時帆足万里の門に修学中であった。
文化一四	一八一七	二	この年、高田に疫病流行し、その治にあたっていた有軒は感染して急逝。ために母にしたがって杵築藩鈴木氏のもとに行く。
文政四	一八二一	六	兄佐之の学ぶ帆足万里の門に入る。
文政六	一八二三	八	シーボルト、長崎に来る。（佐之その鳴滝塾に学ぶ）
文政一一	一八二八	一三	シーボルト事件
文政一二	一八二九	一四	万里門中に在って本草に深い関心を示し、画を杵築藩十市石谷に学ぶ。七―一四歳ころの画帳「琅玕帳」「鶏取帳」他の断片が現存。この年五月から天保五年三月まで、佐之から西洋方臨床を学ぶ。
天保元	一八三〇	一五	高野長英、長崎よりの帰途、伊藤圭介をたずねている。
天保三	一八三二	一八	
天保五	一八三四	一九	父祖の地豊前宇佐郡佐田に帰り、兄に従って京に行く。三月から九月まで、山本亡羊に従い本草学を修める。「鱗貝帳」「京師讀書室　物産會所　觀ヲ記シ或ハ図スル也」（舶來の植物を記している）
天保七	一八三六	二一	阿波に遊ぶ。
天保一〇	一八三九	二四	三月兄嫁を伴い、瀬戸内海を経て湖東、兄の僑居に至る。尾州、勢州、江州、播州、浪花等に遊び、秋十月頃帰国。「遊湖日記」「遊尾漫録」この年四月から天保一二年一二月まで、兄に洋方漢方両医を学ぶ。
天保一一	一八四〇	二五	油布獄に採薬。「油布獄採薬記」
大保一二	一八四一	二六	秋、日向に採薬。高千穂、延岡、

宮崎、飫肥、福島等ほとんど日向の全域にわたって踏査。次回は弘化二年に採薬。「南○遊日記」

天保一三　一八四二　二七　杵築藩の大夫浅井氏に従い江戸に行く。一月四日杵築出航、二月一日浪花着。五月四日浪花発、木曽路を経て五月二十六日江戸浅草着。「木曽日記」

六月一三日浅草発、日光、仙台、山形、新潟、金沢を経て八月一一日京に帰る。「日光採薬記」（嘉永元年夏）「瀬戸内海東遊日記」「東北紀行」

書名中右肩の孔印は孔版印刷、複印は複製印刷、○印は仮印刷。「奥羽紀行」孔

「名勝眞景並奇器図帳」

この年八月から翌年五月まで山本亡羊に学ぶ。

天保一四　一八四三　二八　閏九月一八日より一〇月二〇日まで島原に採薬。「島原採薬記」複

天保一五　一八四四　二九　佐之が島原藩に招かれたため正弘化元　月から郷里佐田で家業を継ぐ。水城大可（秋月橘門）の仲介で延岡に招かれ採薬の旅を準備するも果さず。

弘化二　一八四五　三〇　三月六日ようやく延岡へ発ち、同年一〇月一〇日藩内採薬をはじめる。五月十五日家に帰る。

この採薬行は延岡藩の薬園開設にあたり大きく寄与しているが、跡はさだかでない。「高千穂採薬記」

（寄寓していた専念寺は、戦災で焼失したが、再建されて現存するも飛騨の資料は残っていない。）

帆足万里の北遊に同道。

弘化三　一八四六　三一　杵築藩増田陳弘の三女美須を娶る。「救飢食品考　全　一冊」佐之識

弘化四　一八四七　三二　島原侯から二人扶持を受ける。

嘉永三　一八五〇　三五　西国の飢饉にあたり、藩命により、「救荒本草」所載の記事をわかり易く記す。翌年成る。これにより士民の餓死をまぬがるるもの尠しとせず。

嘉永四　一八五一　三六　三月島原藩より二人扶持を受ける。「救荒本草略説」孔

「評湖魚考」

嘉永五　一八五二　三七　杵築、国東に採薬。三浦梅園の塾に安蘭を訪う。「杵○築採薬記」

安政四　一八五七　四二　佐之、島原にて歿　五九歳。そのあとをうけて島原藩医となる。
安政五　一八五八　四三　コレラの大流行に際し尽力。
文久三　一八六三　四八　夫人美須卒。
元治元　一八六四　四九　五月二二日　母逝去。
慶応三　一八六七　五二　九月　島原侯八〇餞を増賜し医師惣領分格を命ず。
明治二　一八六九　五四　三月　病により餞を辞す。
明治四　一八七一　五六　六月　宇佐郡元島原県管轄部の医長を命ぜらる。二〇餞を賜う。
九月五日　文部省に博物局をおき、元聖堂大成殿を博物館とする。
明治五　一八七二　五七　八月　学制頒布。
明治六　一八七三　五八　三月十九日より博物館は博物局・書籍館・小石川薬園とともに、太政官所管博覧会事務局に合せられる。
佐田村近郷で牛痘を施行、種痘掛に飛霞の印がある。
土冠蜂起の際説諭に尽力して大分県より賞状を与えられる。
長男暢之惣代で仮病院建設の願書を提出。
明治九　一八七六　六一　小倉県より管内物産取調を嘱託せられる。「救荒草木図説」
同県第八大区医務取締を命ぜられる。また宇佐郡公立四日市医学校長兼病院長を嘱託せらる。（但し、現在までのところ確認できない）
明治一〇　一八七七　六二　東京博物館を教育博物館と改称。四月一〇日、教育博物館所轄の小石川植物園を東京大学に移管。
明治一一　一八七八　六三　一一月、東京大学小石川植物園植物取調掛雇を命ぜられる。維新後、伊藤圭介が東京に出て以来、旧友佐之の弟飛霞に書を送り出仕を勧めていたところが実現したもの。
「漫遊植物図譜」自序（題　明治廿一年伊藤圭介）
「東遊備忘録」第五号　第六号
明治一二　一八七九　六四
「植物雑記」を起稿、「東遊備忘録」第八号、「小石川植物園雑記私稿」「東遊雑記」「琉球植物腊葉図」「植物園暖室目録稿」等のノートを在京中書きつづけて

いる。

一二月　小笠原島に採薬。　「小笠原島航海記聞」

明治一三　一八八〇　六五　帰郷。一〇月再び上京。

植物園植物取調方を命ぜられる。年俸三百円。

「採藥記」雑記

「東京再遊日記」

「再遊植物園雑記私稿」

伊藤圭介編「小石川植物園草木目録」の後編単子葉之部及び隠花部官版（廃版とされる）。

明治一四　一八八一　六六

前記「目録」を改版し、後篇付録に、伊藤圭介編「小石川植物園創始沿革」を収める。

伊藤圭介・賀來飛霞共編「小石川植物園草木図説」第一冊刊。

東京大学職制を改める。東京大学御用掛を命ぜられる。

「諸雑費録」

明治一五　一八八二　六七

伊藤圭介八十賀寿祭筵を上野不忍生池院に催し、「錦窠翁祭筵誌」第一巻刊。このとき飛霞の出品あり。

二月二五日　矢田部良吉ほか植物学者有志と共に東京植物学会創立の会を小石川植物園内に開催

「百科節用植物」起稿　未定稿三巻

明治一七　一八八四　六九

伊藤圭介編「救荒植物集説」刊

伊藤圭介述　賀來飛霞筆記「有毒植物集説」刊、官報に掲載される。

「横浜行所観植物之記」

明治一八　一八八五　七〇

「植物學會雑誌」「植物諸説紀聞」

明治一九　一八八六　七一　東京帝国大学令の布告により、東京大学を、東京帝国大学と改称。伊藤圭介は老令の故を以て非職となり、飛霞も辞す。上州黒滝山に遊ぶ。

「上毛黒滝紀行」全一冊。一九丁付六丁。あと書きに「明治十九年丙戌秋八月上毛富岡僑居ニ草ス　十月　七十一才」。

「植物學會記聞」雑記「橘庵漫筆抄録」

明治二〇　一八八七　七二　明治十五年起稿の「臨床講義紀聞　樫村先生口述」筆記帳。（肝臓癌、胃癌にはじまり、肺結核各科に及ぶ詳細なカルテ一七〇頁）

明治二一　一八八八　七三　帰郷。「植物学会記聞」「植物

諸説記聞」「東遊備忘録」八冊、いづれも雑記。

明治二七　一八九四　七九

郷家百花山荘に悠々の生活を悦び詩歌画筆に遊ぶこと数年、流行性感冒により、三月一〇日長逝。立中山先塋に葬られる。諡は得生院青蓮居士。

明治二八　一八九五　門人らは令嗣粲次郎氏と謀り碑を建て、閲歴を記す。象額は伊藤圭介、撰文は、当時大分県師範学校前教諭宇都宮健哉。

（付記）

本稿は、女子聖学院短大の山下愛子氏が、同大学紀要第九号（昭五二、二）に発表された「賀來飛霞―資料編」から抄出したものである。なお、注記は、都合により省略させていただいた。

編集後期

昭和五十三年度会誌編のしんがりを受けもった。会員はもちろん、芸術会館若手学芸員諸氏の意欲的な論説をはじめ、多数の玉稿を寄せていただいたことを感謝している。

巻頭には、中山重記氏の「造神宮寺料の行方について」を掲載した。宇佐神宮領に関するこれまでの諸説に問題提起をされている。今後とも、氏の御活躍を祈りたい。

宗像健一氏は、南宗画の日本化とは何かを追求した。竹田・草坪が「日本化への階程をどのようにたどるのか、個々の作品からの実証を期待する。

後藤龍二氏の論文は、荒井龍男というわが国美術史上未知の作家をとりあげた労作である。荒井の中津における生育歴やその風土が彼の創作にどのような影響を与えたか、今後の調査にまたねばなるまい。

山内美徳氏の論文は、従来、不明であった二豊刀工の存在に触れている。今後、関係古文書をはじめ、現地調査結果、作風の分析などを駆使した密な取組みがまたれる。

安部弥右衛門氏は、六回にわたって「羽出浦の歴史と民俗」